

ライフストーリー研究の方法論

認識論 (epistemology) としての人文 × 社会科学の交差点

中尾 元

1. はじめに

そのときはわからなくとも、後になって振り返ってみて、あの時が人生の岐路であったと考えることは珍しくないであろう¹。また、自分の今後の行く末について考える必要に迫られた際、ふと立ち止まってみてこれまでの筋道と連続的であると思われるものを選択するかもしれない。「地続き」であると思えるもので前に進むことで、自らの「物語」を紡いでいくのかもしれない。いずれにしても、例えば調査として、人々の特定の時間幅を持った体験について尋ねるとはどのような営為になりうるのだろうか。

上記のような問題意識を持つ研究は、総称的にライフストーリー研究と呼ばれる。この調査法は、主に人々のこれまでの人生や過去の出来事の経験に関して調査的面接等を行うことにより、人々の体験への意味付けを探るための方法論である。これは、言い換えれば人々によって「生きられた経験」(lived-experience) について探求をする取り組みである。後述する構成主義 (constructivism) の立場から、人々の固有の認知的な枠組み (frame of reference) や世界観 (worldview) を調査者が把握 (ひいてはそれらに参入 partake) することを重視し、人々が構成している意味世界に迫ろうと努め

1 本稿では詳細に立ち入らないが、曖昧な記号が数字 (13) に見えるか文字 (B) に見えるかに関して、あくまで文脈に依拠するというのを示した Broken-B paradigm と呼ばれる心理学の実験刺激がある (Bruner & Minturn, 1955)。人生における出来事の意味合いも、その時はわからないが、あとになって文脈によって意味づけることができる例えとして紹介される。

るものである。質的研究の取り組みとして、常に語られた内容の固有性と普遍性（一般化可能性）とを慎重に行き来しながら、特定の文化や社会を理解するための方法論である。

面接をはじめとする調査には、調査の遂行者と調査に協力をする参加者との間に常に相互作用が生じている。この点は、調査とは特定の質問を投げかければ、もともと存在していた「答え」が客観的に一対一対応の形で帰ってくるものではないという点で、強調されるべき性質である。本稿の目的は、このような認識論的な背景から、ライフストーリー研究の方法論のいくつかの前提について概観をすることである。

2. 調査や測定 of 「難しさ」について

調査者と調査参加者の相互作用の例として第一に挙げられるのは、以下のような測定・評定（measurement and appraisal）のそもそもの「客観性」の難しさである。比喩的な話ではあるが、（いわゆる接触型の）温度計でビーカーに入っている水の温度を測る場合、温度計は決して水そのものの温度を測ることは原理的にできない。夏場に体温計を身体につけて冷たいと感ずることがあるように、温度計が水に接触した途端に、温度計自体の持っている温度（温かさないし冷たさ）が水の温度に影響を与えてしまっているのである。このような本来的に測定をしている装置（apparatus）が測定の対象に影響を与えてしまっている事態は、社会科学では看過できない事態である。ひいては何らかの調査を行う者が、いったい自分はどのような関心や測定の志向性を持っているのかに自覚的であらねばならないという点で、古くて新しい「観測問題」として重要である。



図1. 認識と対象の相互作用（調査者と参加者の相互作用）の比喩としての温度計²

2 写真は著作権フリーとして下記のリンクから入手した：<https://pixabay.com/ja/>

また相互作用そのものではないが、調査について批判的に考える第二の例として、ヤン・ファールという芸術家の「雲を測る男」というブロンズ像の作品がある。日本語でも「雲をつかむ」ということわざがあるように、雲には対象物としての曖昧さがあるのと同時に、この作品が興味を引く点は、測定をしているものさし³の恣意性である。（ぜひ実際の作品を見ていただきたいが）大空に向かってものさしを広げている男が、一体どこからどこまでをもって「測れた」とみなすのが、ある種の滑稽さを伴って問われているのである。

これらの問題意識を背景に、本稿は以下ではライフストーリー研究の基盤となっている方法論に関して検討を行う。具体的には、ライフストーリー研究法を構成している、「人生の物語」研究、ナラティブ・アプローチ、そしてその基礎となる考え方の構成主義に関してである。

3. ライフストーリー研究法

ライフストーリー研究は「仮説の生成（箕浦，2005）」を企図した質的研究の一つである。ライフストーリー研究は、時にライフヒストリー研究と混同されて捉えられがちであるが、前者は「人生の物語」の研究であり、後者は「生活史」研究である。しかし、両者の決定的な違いは、ライフストーリー研究がナラティブ・モデルに位置づけられていること（やまだ，2007）であり、そのストーリー性はナラティブ概念の物語論的な視点と相通じ（桜井，2005）、それがあくまで「語られた『真実』」に関心を持つ点である。すなわち、ライフヒストリー研究が「歴史的な知見」に関心を持つ（Mann, 1992）のに対し、ライフストーリー研究は語り手によって人生経験がどのように再構

photos/%E6%B8%A9%E5%BA%A6-%E6%B8%A9%E5%BA%A6%E8%A8%88-%E7%99%BA%E7%86%B1-%E3%83%84%E3%83%BC%E3%83%AB-3708808/

- 3 本稿では立ち入らないが、測定のものさしとして言語的な記述に主に依拠するか、あるいは数字に依拠するかも重要な問いである。例えば、「人生の長さ」について検討する際に、哲学者セネカの論考を持ち出すか、あるいは人生を概ね「30000日」とみるかは印象だけでなく検討のための材料が（質的と量的とで）異なってくる。同時に、例えば文化などの社会・集合現象を数値化できないと考えるか、あるいはできてもその多義性ゆえに意味が一つに定まらないと考えるかも重要な問いである（cf. Mohr et al., 2020）。

成され、意味づけられているかの考察を中心に据える。これらを踏まえて、以下ではライフストーリー研究を構成する重要な概念を論じる。ここでは、「人生の物語」と「ナラティヴ」といった二つの概念に着目する。

3.1. 「人生の物語」とは

第一に、ライフストーリー研究を構成する概念の一つである「人生の物語」についてである。

Bruner (1986) は、何らかの経験等に対する個人の意味付けは、物語論的な思考様式によって行われると考察している。この考察で注目すべきは、意味付けの行為とは、何らかの単一の事象や物事に対して行われるというよりも、むしろ出来事について物語（ストーリー）にすることによってその出来事に文脈が与えられ、意味が立ち現れる（emerge）と考える点である。

また、やまだ（2000）は人生の物語（life story; narrative of life）の研究が、人々がライフ（人生・生活・生）を生きていく過程や、その経験プロセスを物語る行為、そして語られた物語についての研究であるとし、具体的に「物語」を「2つ以上の出来事を結びつけて筋立てる行為」や「経験の組織化とそれを意味づける行為」と定義している。ここで重要なのは経験の組織化や意味づけが語り手によって異なり、それが人生全体の意味の変化に影響を与えるということである。

桜井（2005）は、意味づけや経験の組織化は、「語り手が過去の出来事や語り手の経験を表象しているというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築」するものであることを述べている。これは、前述のようにライフストーリー研究が調査者と語り手の相互作用に基づく共同作業であることを強調するものである。

さらに、「人生の物語」研究では語り手の「意味」や「意味づけ」が重要な役割を果たす。ここで言う「意味」とは、幾つかの出来事を結びつけたうえで、語り手によって「意味付け」が具体的にどのようなようになっているかを浮かび上がらせることである。この点で、文化人類学者ギアーツ（1987）の「厚い記述（thick description）」という概念が重要となる。「厚い記述」とは、単にデータの記述量が豊富であることではなく、行為者にとっての行為の意味が語られ、浮かび上がることを指す。そのため、データ収集では、語り手自身の意味づけを調査者が記述する試みが重要となる。

3.2. ナラティブ・アプローチとは

ライフストーリー研究の構成概念として、二つ目にナラティブ・モデル、すなわちナラティブ・アプローチについて触れる。まずその前提に触れ、その背後にある認識論である構成主義を概観し、最後にナラティブ・アプローチの実際の手続きを整理する。

3.3. ナラティブ・アプローチの前提

ナラティブ (narrative) とは辞書的な意味では「物語・話・語ること⁴」を意味し、動詞の narrate には「(順序だてて) 語る・述べる」といった意味がある。ここから、基本的なイメージとして「具体的な出来事や経験を順序立てて物語ったもの (野口, 2005)」が導き出される。特に箕浦 (2002) は、ナラティブの特徴として、それが単に事象や物事を喋ることではなく、あくまで意味的なまとまりをもった語りであり、「事象・精神状態・登場人物に関わる『始まり-中間-終わり』という時系列性を内在した流れ」であることを指摘している。

ナラティブ・アプローチの前提としては、人々には「それぞれの経験に沿って自らが生成したストーリーや意味がある (秋山, 2003)」という立場がある。これを換言すれば、語り手は自身の語る「物語」に沿って話すため、その物語に沿わないことは自覚的にも (非自覚的にも) 語られない、ということである。これは、語り手たちにとっての生きる世界は、あくまでその語られる限りでの世界であるとし、いわゆる「事実」とはそのような性質のものであるとして容認する立場である。

これは、後述する構成主義的な立場である。浅野 (2003) は、物語論や記憶研究が、心理学の分野で早くから構成主義の見方で定着してきたことを指摘している。稲沢 (2005) も、「各人が独自に構成している意味世界のあり方の中でも、とりわけ、自分自身について、それが反省的に捉えられた場合」にナラティブの形式が形成されることを構成主義の立場と関連付けながら論じている。次に、これらの背景となっている構成主義に関して触れる。

4 もともと、「物語る」という意味の語源を持つ単語とされる (cf. 小西・南出, 2001)。

3.4. 構成主義について

構成主義 (constructivism) は、認識論上の新しい理論的枠組み (Jonassen, 1991) である。これは世界やいわゆる「事実」というものは誰しにも同じ客観的な姿で立ち現れる「外部世界」ではなく、それぞれの認識主体によって構成されるとする立場である。Bruner (1986) によれば、このような構成主義の見方は、それをはじめて十分に展開した哲学者カントまで遡ることが出来る。カントについて黒崎 (2000) は、特にその「コペルニクスの転回」が認識論上の転換となったとしている。したがって、ここでの構成主義の起源とされる「コペルニクスの転回」に焦点を当てて論じることにする。

コペルニクスの転回とは、端的に言えば「認識は対象に従うのではなく、逆に対象の方が認識に従う (瀬戸, 1998)」という転回である。人間の認識対象である現実を、所与の性質としてみる考え方、すなわち外部から人間に一方的に与えられる客観的事実とみる考え方から、人間が認識し構成する限りにおいての現実、とみる考え方への転換を意味している。とりわけ、経験に先立つ先験的^{ア・プリオリ}な認識カテゴリー (カント, 1977)、すなわち時間概念や空間概念、因果関係の概念に代表されるような「分量・性質・関係・様態 (カント, 1977)」等の人間の認識の形式、つまり人間の情報処理のための枠組みによって、現実を構成しているとする議論である。

このように構成主義の発端はカントとされるが、スイスの認識論者で心理学者のピアジェも、発達論・発生的な立場から、同様の構成主義的な認識論を展開している。赤須 (1991) が述べているように、ピアジェは、人間は行動 (行為) により現実を構成しつつ発達すると考えている。これは、これまでの構成主義の見方と同様、現実^{ア・プリオリ}は認識主体と無関係に存在せず、人間が現実を構成しているという立場であるが、その認識の枠組みの発達のな変化を論じたことに特徴がある。すなわち、ピアジェ (2007) は、人間の発達段階における乳児期 (感覚運動器)、幼児期 (前操作期)、児童期 (具体的操作期)、青年期 (形式的操作期) のそれぞれの時期で、何が現実として認識されるかが変化していくと述べている。具体的な変化としては、はじめの段階では、現実^{ア・プリオリ}は、例えば「ものをつかむ」といった行動のシエム (行動の図式・枠組み) と同じであるが、その後徐々に見立て遊びが出来るようなイメージを獲得するにつれ、イメージが現実となり、やがては概念を獲得し、概念が現実となるというものである。また、後の方の段階になれば前の段階を含

み持つことが出来る。このように、ピアジェは何が現実となるかは人間の発達段階によって異なるといった見方を示している。

マクナミーとガーゲン（1997）は、さらに生物学的な議論を展開し、「何が『現実』として見えるかはその生物有機体に備わった固有の器官の働きによって決定される」と述べている。ここまでみたように、構成主義は素朴な事実観を問い直し、認識主体の積極的な働きに着目してきた立場であるといえよう。

3.5. ナラティブ・アプローチの手続き

ここまでライフストーリー研究の構成概念の一つとなるナラティブ・アプローチの前提と背景をみてきたが、ここでは実際に行われるナラティブ・アプローチの構造（面接における構造化）を論じる。ここでは、「外在化（言語化）」、「リ・ストーリーリング（再著述）」そして「現実の再構築」といった三つの段階が重要となる。

秋山（2003）によれば、この段階は具体的に次のようになる。以下の説明は、心理療法のナラティブ・セラピーの文脈でなされているため、語り手への医療的な視点で論じられているが、基本的な構造は実際の手続きとして参考となろう。ここでの「当事者」とは、調査における参加者として読み替えが可能である。

- ① 当事者からドミナント・ストーリーを引き剥がし、抑圧され言語化出来なかった事柄の顕在化を援助することが最初の作業である
- ② ①により、固有の意味を持ったオルタナティブ・ストーリーが展開される。このオルタナティブ・ストーリーにより、新たな当事者の自己像、当事者を取り巻く人間関係、「事実」に対する認識と意味が描写されることになる。これが「リ・ストーリーリング（再著述）」である
- ③ このオルタナティブ・ストーリーに沿って当事者が「事実」や「現実」を再定義し、当事者の意味の世界の再構築を促す。これによって、問題の再定義が可能となる

（筆者が [秋山, 2003] を簡縮化し、三点に整理した）

冒頭の①でいうドミナント・ストーリーとは、何らかの「問題を抱えた支

配的な物語」のことであり、これは多く当時者にとっての「客観的な事柄」を含むと認識されているものである。ここでの作業はこれを引き剥がすことであり、これは医療ワーカーと共同で行われる。具体的には、あくまで主観的な「事実」に基づくストーリーを当事者が語ることを促すことにより（この作業が「外在化 [言語化]」といわれる）、本人にも意識化の出来ていなかった事柄への語りへ向かう。これにより、その段階では本人も言語化できておらず、認識されていなかった「書き換えられる後に来るべきストーリー」であるオルタナティブ・ストーリーの言語化が可能となり、代替的な物語を意味するオルタナティブ・ストーリーが展開されることとなる。

第二の②では、ここで当事者にとっての自己認識や周囲への認識が新しく生まれる（刷新が促される）こととなる。これが「リ・ストーリーング（再著述）」である。

最後に③では、①②を踏まえた上での現実の新しい意味づけ、定義づけが可能となり、当事者の意味世界が再構成されることとなる。これが「現実の再定義」である。これによって、当事者は自らのなすべき行為や行動に気付くことができるようになるとされる。

ここまでみてきたように、ライフストーリー研究法は「人生の物語」の研究とナラティブ・アプローチを重要な概念として含んでいる。この研究法は、語り手自身が調査者によって再構成されつつ、語り手にとっての前提や意味世界を組織立てて「語る」のを考察する研究であると位置づけることが可能であろう。その意味でも、語られた人生や経験の「意味」は、調査者と語り手の共同制作として編成・生成されていくという認識が重要となろう。

4. ライフストーリー研究の手続きの例

これまでライフストーリー研究の背景について検討を行ってきた。以下では、特定の調査の方法としてライフストーリー研究法を採用する際の基準について簡単に触れる。

すなわち、ライフストーリー研究を採用する理由として、次の二点ほどが強調される場合に、調査法としての強みを発揮するだろうということである。内容としては、(1) 客観主義的な見方でのいわゆる「事実」の把握よりも、語り手の意味世界を把握しようとする立場、(2) 時系列的な変遷や変化などプロセスの観点を取り入れる調査、の二点である。これらは前述の構成主義

の立場にたち、時間軸の把握を可能にするライフストーリー研究法が有効であろう。

4.1. 調査の方法

また具体的な手続きの観点からは、下記が要点であろう。

すなわち、仮に調査協力者への面接法が用いられる場合、面接では、テープレコーダーによって会話を録音し、その後出来るだけ早い段階で編集(テープ起こしや文章整理の作業、情報補足の作業等)を行うことが重要となる。例えば実際の面接調査では、協力者への現象学的アプローチ⁵による半構造化面接が実施されるなど、バリエーションには自由度があろう。また面接以外の情報源としても、調査協力者本人から得られる資料や文書等の情報を用いることも肝要であろう。

4.2. 質問項目の一例

例えば面接調査で尋ねる質問は、構造化・半構造化の程度も然ることながら、あくまで研究テーマや調査の目的によって構成されるものである。その一方で、下記で挙げるような質問は、様々なライフストーリー研究に応用できるものと考えられる。

すなわち、ライフストーリーを尋ねる質問項目としては、「いまの〇〇さんにとって一番古い記憶は、どのようなものでしょうか?」というものがある。この質問項目は、本橋(2007)が述べているように、参加者が「一番古い記憶を思い出してくれたとき(中略)、それ以降の話もスムーズに聞ける」ようになるとされる質問項目である。前述のように参加者が物語を構成していく観点で面接調査が進むことを考えると、このような参加者にとっての「意識の起点」に関する質問項目は重要であろう。

同時に、「いまの〇〇さんにとって」というリード文は、あくまで現在の立場から参加者が話の内容を構成していくことを助ける点でも効果的である

5 本稿では詳細を論じないが、面接を実施する際に調査者に求められる基本的な態度や技法として、「開かれた質問」や「感情の反射」、「慎重な確かめ」としての判断保留(エポケー)の態度などがある。これらについては、Breakwell et al. (2012)やCreswell (2006)、高橋・渡辺・大淵(2011)等を参照されたい。

(この意味では、必要であれば、「現在思い出せる範囲で」等のリード文も同様の意味合いとなろう)。

面接での具体的な手続きとして、上記のような意識の起点としての開かれた質問の後、調査者は参加者に対して「慎重な確かめ」を行い、必要であれば適宜内容の焦点化のために更なる質問 (probing) を「開かれた問い」の形態で行っていくことなどが重要であろう。このような一連の手続きを踏まえることで、前述のような参加者の意味世界に迫ることが可能となる。

4.3. 結果の整理と分析方法

例えば野村 (2005) やビアルケ・青木 (2005)、ビアルケ (2006) などにみられるように、「語り」をデータとして取り扱うライフストーリー研究法ではいくつかの構造的な一貫性に着目するデータ整理・分析方法が用いられている。

これらの研究で行われている方法論に基づくと、ライフストーリー研究では次の二つのようなアプローチが分析枠組みとして有効であろう。

すなわち、①水野 (2000) の開発した CM 法 (事例媒介的アプローチ) による、データから時期や意味内容によりカテゴリーを一行見出しのように切片化していく方法と、②特に一貫性の分析枠組みとして提起された Habermas & Bluck (2000) の、「時間的一貫性」「因果的一貫性」「主題的一貫性」などに着目し、「語り」の内容から分析カテゴリーを抽出する方法、の二点である。Habermas & Bluck (2000) の分析枠組みは、上記の三つの一貫性が常にすべて満たされるわけではないとされ、あくまでデータに即した構造化が目指されている。

また、いくつかのカテゴリーを構築の際には、具体的にどのようなデータに根拠しているのか、語りの具体例 (逐語的な引用句 *verbatim*) の提示が重要であろう。このような作業は、質的研究における解釈の多様性・多義性を担保する試みであり、同時に調査におけるコーディングのプロセスに関しても反証可能性を保証することが科学性の条件の一つであるとする科学論の議論に基づくものである⁶。

6 カテゴリー構築とも関連する議論として、カテゴリーや理論の構築を根本的な認識論から問い直している議論は、科学を「同一性の探求」とする構造主義科学論を提

5. おわりに

本稿では、主に認識論を中心としながら、ライフストーリー研究にまつわる方法論のいくつかの前提に関して概観を行った。物語論やナラティブ・アプローチ、そして構成主義の考え方などは、具体的なライフストーリー調査を進めるための理論的基盤（rationale; anchor）として重要となろう。

方法論のなかで、調査的面接を一つの例として挙げたが、インタビューは英語の語源でいうところの *inter + view* の言葉の通り、異なるもの同士が互いの見解をつき合わせ、どのような（新しい）見方が生まれるかをみる機会である。調査的面接が、新しい見解や知見が生成される場としての面接として機能するためにも、本稿で挙げたような理論的な見地がますます有効になると思われる。

最後に、主に質的研究法に関して論じることは、調査を通してデータを得る実証的な社会科学と、哲学の認識論との交差点をよく体现していると思われる。これは歴史的にみても、心理学（行動科学）を人文学に基礎付けられた学問分野であると改めて位置づけることができる点において、学問としての「人文×社会」の位相を表現しているとも思われる。本稿で挙げたような様々な方法論の基礎付けに依拠しながら、質的心理学の一方法として多くの実証研究が生まれることが期待される。

6. 引用文献

- 赤須知明 (1991). ピアジェの構成主義 長谷川啓三 (編) 構成主義 現代のエスプリ, 287, 至文堂, 32-40.
- 秋山薊二 (2003). 社会構成主義とナラティブ・アプローチ—ソーシャルワークの視点から 関東学院大学人文科学研究年報, 27, 3-16.
- 浅野智彦 (2003). 物語と〈語りえないもの〉 年報 社会科学基礎論研究 社会調査の知識社会学, 2, 98-115.
- ビアルケ (當山) 千咲・青木幸子 (2005). 人生の軌跡の再構成と学校経験に関する一考察 - ある一人の女性のライフストーリーの分析から - 教育研究, 47, 135-143.

起している池田 (1998, 2007) に詳しい。

- ビアルケ (當山) 千咲 (2006). 生徒の異文化体験と親の教育戦略に関する一考察 - ある帰国正のライフストーリーの再構成に基づいて - 教育研究, 48, 175-184.
- Breakwell, G. M., Smith, J. A., & Wright, D. B. (2012). *Research methods in psychology (4th edition)*. Sage.
- Bruner, J.S. & Minturn, A.L. (1955). Perceptual identification and perceptual organisation. *Journal of General Psychology*, 53, 21-28.
- Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Harvard University Press. (ブルーナー, J. 田中一彦 (訳) (1998). 可能世界の心理 みすず書房)
- Creswell, J. W. (2006). *Qualitative inquiry and research design: Choosing among five approaches (2nd Edition)*. Sage.
- ギアーツ, C. (1987). 吉田禎吾・柳川弘充・板橋作美 (訳) 文化の解釈学 1 岩波書店
- Habermas, T. & Bluck, S. (2000). Getting a life: The emergence of the life story in adolescence. *Psychological Bulletin*, 126(5), 748-769.
- 池田清彦 (1998). 構造主義科学論の冒険 講談社
- 池田清彦 (2007). 科学とオカルト 講談社
- 稲沢公一 (2005). 構成主義・ナラティブ 久保絃章・副田あけみ (編著) ソーシャルワークの実践モデル 川島書店
- Jonassen, D.H. (1991). Objectivism versus constructivism: Do we need a new philosophical paradigm? *Education and Technology Research and Development*, 39(3), 5-14.
- カント, I. 篠田英雄 (訳) (1977). プロレゴメナ 岩波書店
- 小西友七・南出康世 (編集) (2001). narrate, narrative ジーニアス英和大事典 大修館書店
- 黒崎政男 (2000). カント『純粹理性批判』入門 講談社
- マクナミー, S.・ガーゲン, K. J. 野口裕二・野村直樹 (訳) (1997). ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践 金剛出版
- Mann, S. J. (1992). Telling a life story: Issues for research. *Management education and development*, 23 (3), 271-280.
- 箕浦康子 (2002). 第二章 研究方法論としての解釈的アプローチ：客観的な社会的現実はあるのか？ 箕浦康子 (研究代表) 日本における文化接触研究の集大成と理論化 課題番号 12610118 平成 12 ~ 13 年度科学研究費

補助金基礎研究 (C) 研究成果報告書

- 箕浦康子 (2005). フィールドワーク後期 箕浦康子(編著) フィールドワークの技法と実際 ミネルヴァ書房
- 水野節夫 (2000). 事例分析への挑戦 東信堂
- Mohr, J., Bail, C., Frye, M., Lena, J., Lizardo, O., MacDonnell, T., . . . Wherry, F. (2020). *Measuring culture*. New York: Columbia University Press. doi:10.7312/mohr18028
- 本橋信宏 (2007). 心を開かせる技術 幻冬社
- 野口裕二 (2005). ナラティブの臨床社会学 勁草書房
- 野村晴夫 (2005). 構造的ー貫性に着目したナラティブ分析 発達心理学研究, 16(2), 109-121.
- ピアジェ, J. 中垣敬 (訳) (2007). ピアジェに学ぶ認知発達の科学 北大路書房
- 桜井厚 (2005). はじめに 桜井厚・小林多寿子 (編著) ライフストーリー・インタビュー せりか書房
- 瀬戸一夫 (1998). コペルニクスの転回 廣松渉ほか (編) 岩波哲学・思想事典 岩波書店
- 高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一(編著)(2011). 人間科学研究法ハンドブック(第2版) ナカニシヤ出版
- やまだようこ (2000). 展望 人生を物語ることの意味 - なぜライフストーリー研究か? - 教育心理学年報, 39, 146-161.
- やまだようこ (2007). ライフストーリー・インタビュー やまだようこ (編) 質的心理学の方法 新曜社